



Title	高校必修クラブに関する一考察
Author(s)	黒須, 充; 神, 文雄; 綱分, 憲明
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1986, 26(2), p.101-112
Issue Date	1986-03
URL	http://hdl.handle.net/10069/15218
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-30T08:35:58Z

高校必修クラブに関する一考察

黒須 充・神 文雄・綱分 憲明*

A Study of Physical Educational Clubs on the Regular Classes

Mitsuru KUROSU

Fumio JIN

Noriaki TSUNAWAKE

I はじめに

昭和45年に高等学校の学習指導要領が改訂され、全員必修のクラブ活動（以後、必修クラブと呼ぶ）が教育課程に位置づけられた。改訂後4～5年は、必修クラブに関する研究も盛んにおこなわれたが、その後はあまり取り上げられることもなく、どちらかといえば忌避されてきたようにさえ感じる。その間、各学校において様々な創意・工夫がなされてきたわけだが、いまだその方向は漠然としており、多くの課題を抱えているように思われる。しかし、その理念はいまでも必要とされているのが現状であり、ここに改めて「必修クラブ再検討」がなされねばならないと考える。まず、必修クラブを設置するに至った社会的背景から見ていくこととする。

II 必修クラブ誕生の社会的背景

ここでは、戦後の「クラブ活動」の変遷を追うなかで、必修クラブがどのような背景のもとに誕生したかを見ていくこととする。

戦後の学校教育（高等学校）における「クラブ活動」は、昭和22年の選択教科の一部としての自由研究を発端として、26年、30年、35年の特別教育活動、45年の各教科以外の教育活動、53年の特別活動とその名称は変更されたものの、教育課程上の一つの重要な領域として今日まで位置づけられている。この間、

* 長崎県立女子短期大学

昭和45年の学習指導要領の改訂で、クラブ活動の取り扱いが大きく変わり、全員必修のクラブ活動、いわゆる必修クラブの誕生をみた。

当時、「知育の偏重」「個性の喪失」等が言われ始めたこともあって、クラブ活動のもつ多面的な価値を、一部の生徒だけではなく、全ての生徒に経験させようといった教育的な意味からの誕生と言えるが、その背後には、スポーツの大衆化、生涯スポーツの提唱、クラブ活動、特に運動クラブの行き過ぎや顧問教師の勤務時間の問題等が含まれていたことは言うまでもあるまい。こうして、従来のクラブ活動の持つ教育的側面は必修クラブへ、競技的側面については社会体育の領域へと移行することがこの指導要領によってほのめかされた。ここで問題となったのが、従来の運動部（以後、部活動と呼ぶ）であり、その位置づけが、学校教育活動の中で不明確なものとなり、教育現場では以後その取り扱いをめぐる、混乱を生じることとなった。しかし、その後、必修クラブの成果があまり芳しくなかったこと、社会体育への移行がスムーズになされなかったことなどから、昭和53年に出された現行の学習指導要領においては、「特別活動との関連を十分考慮して文化部や運動部などの活動が活発に実施されるようにするものとする¹⁾」と部活動が再度学校教育活動として明確に位置づけられるようになった。

こうした経過からみても、今日の必修クラブは、誕生時の部活動に代わりうるものといった考え方とは多少変わってきており、必修クラブおよび部活動が、そして学外の社会体育の諸活動がそれぞれ並存しながら、独自の役割を果たすよう期待されているといえまいか。

では、次にこの誕生の経過をふまえて、必修クラブの今日的あり方を考えてみることにする。

Ⅲ 必修クラブ（体育的クラブ）の今日的あり方

必修クラブはいかにあるべきかを考察するため、1)学校教育の中での位置づけ、2)学校体育の中での位置づけ、といった2つの視点からとらえてみる。

(1) 学校教育のねらいを充実させるための必修クラブのあり方

受験競争激化の中、断片的知識の詰め込みや記憶中心の学習は、落ちこぼれ、非行、登校拒否等の社会問題を生みだした。こうした受け身の・画一的な教育への反省から、昭和51年、教育課程審議会から、小・中・高の教育課程の改善

についての答申が出され、「自ら考え正しく判断できる力を持つ児童・生徒の育成²⁾」といった主体的・個性的な教育が今後ぜひとも必要であることが指摘され、昭和53年現行の学習指導要領の改訂をみた。情報を主体的に選択し、自己の生活において画一的でない個性のある生き方が要請されている今日の社会において、学校の全教育活動はもちろんのこと、各々の運動文化を、生徒が自己の興味や関心のもとに主体的に選択し、意欲的・発展的に学習するといった機会をもつ必修クラブは、まさにこの教育目標に応えるものといえよう。

(2) 学校体育のねらいを充実させるための必修クラブのあり方

現代における価値の多様化は、スポーツへの人々の取り組み方や興味の持ち方、すなわち一人が複数のスポーツを楽しむ時代といったスポーツの多様化にも結びつき、各個人の生活の中におけるスポーツの意味を益々大きなものとしている。このような社会の変化は、スポーツの考え方にも当然影響を及ぼし、必修クラブ誕生時は、体力づくり、人づくりといった手段的な側面の強い考え方（手段論）が学校体育での大きな課題であったのに対し、今日ではスポーツそのものの楽しさを味わうことを目的とする考え方（目的内容論）へと変容してきている。それは、すなわちスポーツの持つ文化的側面を重視することであり、学校における全体育的活動はもちろんのこと、共通の興味・関心を持つ生徒の自主的活動であり、学年・学級の枠を離れた異質集団といった基盤をもつクラブ活動、それは部活動であり、必修クラブであるが、文化としてのスポーツの側面の中で、前者は主に「専門的知識や高度な技能の習得からの楽しさ」を、後者は主に「人間的なふれあいから生じる楽しさ」を強調するものといえる。そして、こうした経験をする中で、各人が自己の生活の中でのスポーツの価値を徐々に高め、現在および将来にわたって、スポーツとの望ましいかわりをもちつづけることが可能となるであろう。

本研究はこうした視点にたち、「必修クラブ再検討」を試みようとするものだが、その一資料を得るため大学一回生に高校時代の必修クラブに対する意識を調査した。

Ⅳ 必修クラブ経験者（大学1回生）の意識に関する調査

(1) 調査対象…長崎大学1回生511名、長崎県立女子短期大学1回生177名、計688名。

(2) 調査期間…昭和60年1月～2月。

(3) 調査方法…質問紙法を用い、配布と回収は保健体育の授業時に担当教官を通じて行った。

(4) 調査の内容

1) 1, 2, 3年次の必修クラブ名を記入させそれぞれについての意識を以下の9項目から問うた。

〈必修クラブへの参加態度〉

- ① そのクラブにすすんで参加しましたか。
- ② そのクラブの中でみんなと協力して活動しましたか。

〈タテマエとホンネのギャップ〉

タテマエ（学習指導要領）とホンネ（実態）のギャップをみるため、指導要領にある「教師の適切な指導のもとに、学年やホームルームの所属を離れて、共通の興味・関心をもつ生徒をもって組織することを原則とし、……本質として自主性・自発性を重んじることは言うまでもない」³⁾を参考に、次の4つを質問項目とした。

- ③ 円滑な活動をおこなうために教師の指導が適切になされていましたか。
- ④ 上級生・下級生が何でも話し合えるような雰囲気がありましたか。
- ⑤ 自由で活発な活動がなされましたか。
- ⑥ あなたがやりたいと思っていた内容と一致した活動がなされましたか。

〈必修クラブの教育的意義〉

- ⑦ 先生と親しくなったり仲の良い友人をつくるのに役立ったと思いますか。
(社会性の育成)
- ⑧ あなたの趣味・興味を伸ばすことに役立ったと思いますか。
(個性の伸長)
- ⑨ あなたの学校生活にゆとりをもたらす上で役立ったと思いますか。
(学校生活のゆとり)

以上、9項目を取り上げ、男女、学年、選択希望、クラブ（体育的 or 文化的）との関連をみた。

2) 学校体育団体や各種競技団体の影響を受ける部活動に対し、対外競技を志向しないことを原則とする必修クラブは、これから対外的条件には支配されず、学校の自由裁量にまかされている。このため、各学校で様々な形態で実施され

ているのが現状である。そこで、実施形態を以下のように3つのタイプに分類し、ア～エの4つの質問項目との関連をみた。

分離型：授業時間内に必修クラブの時間を単独に設け、放課後に部活動を実施

混合型：最終時限に必修クラブの時間を設け、引き続くかたちで部活動を実施

単一型：必修クラブを部活動の中で実施

ア. 必修クラブのねらいを理解して活動していたと思いますか。

イ. 小・中学校と比べて高校の必修クラブは満足できるものでしたか。

ウ. 高校生活を振り返ってみて必修クラブは必要であったと思いますか。

エ. 必修クラブの経験が今後の学生・社会生活において役に立つと思いますか。

(5) 分析方法…回収した調査表うち、高校時代「必修クラブを経験しなかった」とする者を除いた675名(男子295名、女子380名)を分析の対象とした(有効データ率98.1%)。なお、高校3年次の回答については、進学校からの学生が多く、「名目・形式だけ」「受験のための時間」「3年次は実施せず」といった回答が多数存在したので、今回の分析から除外した。また、有意差検定は χ^2 検定を用い、必要に応じてクラマー係数を表示した。

(6) 結果と考察

《男女・学年別にみた意識》

図1は、男女・学年別にみた質問9項目についての肯定率を示したものである。〈参加態度〉については、「参加意欲」、「協力的態度」とも高率を示し、必修クラブに取り組む積極的姿勢がうかがえる。しかし、〈実態〉を示す「教師の適切な指

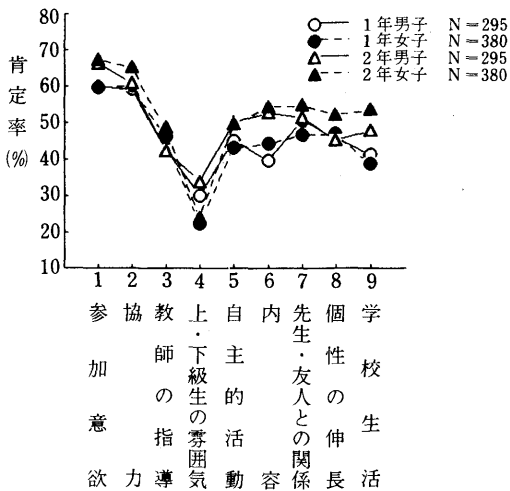


図1 男女・学年別意識の肯定率

導」「上・下級生の雰囲気」「自主的活動」は、50%以下であり、なかでも「上・下級生の雰囲気」は、20～30%台と低率であり、指導要領の示す目標と生徒の参加、活動の意識には、かなりのへだたりがあることがわかる。

表1 男女と質問項目との関連

項 目		1年	2年
態 度	参 別 意 欲		
	協 力		
実	教 師 の 指 導		
	上・下級生の雰囲気	*	*
態	自 主 的 活 動		
	内 容		
意 義	先生・友人との関係		
	個 性 の 伸 長		*
	学 校 生 活		

** P<0.01 * P<0.05

表2 学年と質問項目との関連

項 目		男子	女子
態 度	参 加 意 欲	*	**
	協 力		
実	教 師 の 指 導		
	上・下級生の雰囲気		
態	自 主 的 活 動		*
	内 容	**	**
意 義	先生・友人との関係		*
	個 性 の 伸 長		
	学 校 生 活		*

** P<0.01 * P<0.05

表1・2は、男女別、学年別の関連をみたものだが、男女別では「上・下級生の雰囲気」で、1・2年ともにP<0.05の有意差がみられ、男子が女子よりも高い肯定率を示す傾向にあった。また、学年別では、「参加意欲」「内容」で男女とも、「自主的活動」「先生・友人との関係」「学校生活」で女子において有意な関連がみられ、1年よりも2年の方が、つまり学年が進行するにつれて、意識が高まる傾向がみられた。

〈選択別にみた意識〉

表3 選択希望と質問項目との関連

項 目		1年	2年	項 目		1年	2年					
男	態 参 加 意 欲	**	.589	**	.394	態 参 加 意 欲	**	.412	**	.399		
	度 協 力	**	.333	*	.151	度 協 力	**	.230	**	.281		
	実	教 師 の 指 導		.098		.054	実	教 師 の 指 導		.062		.098
		上・下級生の雰囲気		.121		.050		上・下級生の雰囲気		.100	**	.183
	態	自 主 的 活 動	**	.214	*	.173	態	自 主 的 活 動	**	.268	**	.310
		内 容	**	.346	**	.341		内 容	**	.337	**	.345
子 意 義	先生・友人との関係	**	.256	**	.203	子 意 義	先生・友人との関係	*	.151	**	.253	
	個 性 の 伸 長	**	.391	**	.213		個 性 の 伸 長	**	.283	**	.370	
	学 校 生 活	**	.318	**	.230		学 校 生 活	**	.374	**	.354	

** P<0.01 * P<0.05

施設・用具、指導者の不足等により、クラブ数、種目の限定、人員の調整を行わざるおえないのが現状であり、調査結果からも20.6%、約5人に1人の割合でどうしても選択希望がかなえられないものがある。表3は、選択希望と意識との関連をみたものであるが、男女、学年を問わずほとんどの項目において、有意な関連がみられた。

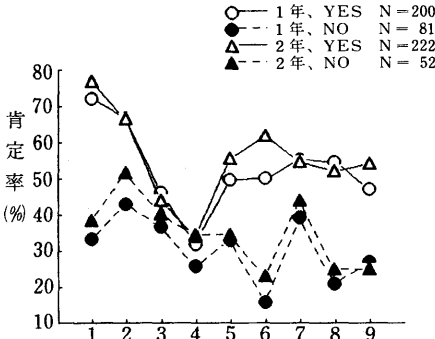


図2 選択希望別意識の肯定率(男子)

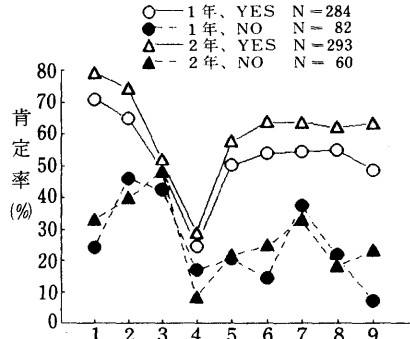


図3 選択希望別意識の肯定率(女子)

図2、図3からもわかるように、希望がかなえられた者は、そうでない者より高い肯定率を示す傾向にあり、反対に希望の満たされなかった者に、意識全般にわたって低い値を示していることがわかる。

《体育的 or 文化的クラブでみた意識》

表4 体育的 or 文化的クラブと質問項目との関連

				参加意欲	協力	教師の指導	上・下級生の雰囲気	自主的活動	内容	先生・友人との関係	個性の伸長	学校生活
	1年	2年	N									
男子	体->体	96	+	-	+	+	+	+	+	±	+	+
	体->文	39	-	-	**	-	-	-	**	+	-	-
	文->体	44	+	**	+	**	+	+	*	**	+	**
	文->文	96	+	+	+	-	+	+	+	+	-	+
女子	体->体	84	+	-	+	+	+	+	+	+	+	+
	体->文	71	-	+	+	-	-	+	+	+	+	+
	文->体	37	+	**	+	+	±	+	**	+	+	+
	文->文	172	+	*	+	+	+	+	+	+	*	**

** P<0.01 * P<0.05

表4は、1年次および2年次のクラブによって、以下に示す4つのグループに分け、1年次から2年次にかけての意識の変化（肯定率の上昇を+、低下を-と記す）をみたものである。

体→体：1年次、2年次とも体育的クラブ

体→文：1年次体育的クラブで2年次は文化的クラブ

文→体：1年次文化的クラブで2年次は体育的クラブ

文→文：1年次、2年次とも文化的クラブ

男子では、体→文の「上・下級生の雰囲気」に $P < 0.05$ で、「協力」、「自主的活動」に $P < 0.01$ で有意な関連がみられた。また、文→体においては、「参加意欲」「協力」「自主的活動」「内容」「学校生活」にいずれも $P < 0.01$ で有意な関連がみられた。女子では、文→体の「参加意欲」「自主的活動」に $P < 0.01$ で有意な関連がみられた。また、文→文の「参加意欲」「先生・友人との関係」に $P < 0.05$ で、「学校生活」に $P < 0.01$ で有意な関連がみられた。

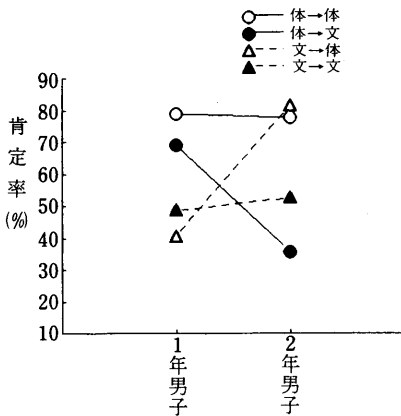


図4 協力

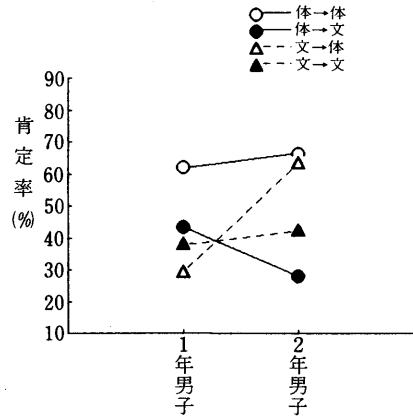


図5 自主的活動

図4、5からもわかるように、体育的クラブから文化的クラブへ変わるときに肯定率が低下し、逆に文化的クラブから体育的クラブへ変わるときに肯定率が高まる傾向にあることがうかがえる。

このことから、体育的クラブは、文化的クラブよりも支持される傾向にあるといえよう。

《実施形態別にみた意識》

表5は各学校の実施形態をタイプ別に示したものである。

表5 実施形態の分類 % (n)

	分離型	混合型	単一型
男	20.8 (61)	49.5 (145)	29.7 (87)
女	15.4 (58)	52.3 (197)	32.4 (122)

分離型とは、必修クラブと部活動を明確に区別し、授業時間内に必修クラブを、課外に部活動を実施している学校である。また混合型とは、必修クラブと部活動を一応別途のクラブとして位置づけてはいるものの、あまり明確な区別とはいえず、たとえば最終時限に必修クラブを実施し、引き続くかたち（ぶらさがり）で、部活動を実施している学校である。単一型とは、必修クラブと部活動を一本化し、たとえば第7時限目の必修クラブがそのまま課外の部活動に接続している学校である。分離型、混合型においては、各学校の方針によって、部活動に所属している生徒の必修クラブへの参加に関しては、同一クラブへ所属して良しとする学校と、異なるクラブへ所属するよう指導している学校とがあり、クラブの構成員も多様性に富むが、単一型においては、必修クラブと部活動の構成員が同一である点に特徴がある。

表6は、必修クラブのねらいを理解しているかどうかについて、実施形態別にみたものである。

表6 ねらいの理解度

	男子			女子		
	理解	どちらとも いえない	理解せず	理解	どちらとも いえない	理解せず
分離型	47.4	20.3	37.3	42.4	21.1	31.6
混合型	37.2	16.1	42.7	41.3	18.4	44.4
単一型	47.1	14.1	44.7	41.2	20.7	32.2

男子：ns、女子：ns

ねらいの理解度については、男女とも3つのタイプの間に関連はみら

れなかった。ただし、全体的に「理解せず」の比率が高いことは、必修クラブの目標が今一つ明確さに欠け、生徒に理解されていないものと思われる。「目的が抽象的で各自の成果を確認できない⁴⁾」と松永も指摘しているように、生徒の興味・関心に基づくことを前提とする必修クラブにおいて、その興味・関心を具体的に活動の目標や内容へと再編成する段階まで到達してないのが現状といえよう。

また、表7は小・中学校と比較した満足度、表8は必修クラブの必要性についてみたものであるが、いずれも女子に $P < 0.05$ で有意な関連がみられた。

表7 小・中学校と比較した満足度

%

	男 子			女 子		
	満 足	どちらとも いえない	不 満 足	満 足	どちらとも いえない	不 満 足
分離型	42.2	33.9	23.7	62.1	19.0	19.0
混合型	42.0	26.6	31.5	39.1	24.3	36.6
単一型	50.6	21.2	28.2	47.1	23.1	29.8

男子：ns，女子： $P < 0.05$

表8 必修クラブの必要性

%

	男 子			女 子		
	必 要	どちらとも いえない	不 必 要	必 要	どちらとも いえない	不 必 要
分離型	76.3	8.5	15.3	84.5	8.6	6.9
混合型	66.0	9.0	25.0	65.5	10.7	23.9
単一型	70.6	11.8	17.6	74.4	11.6	14.0

男子：ns，女子： $P < 0.05$

小・中学校と比較した満足度では、分離型62.1%、単一型47.1%の「満足」に対し、混合型は39.1%と低い値を示しているのが注目される。必修クラブの必要性についても、分離型の84.5%、単一型の74.4%が必要性を感じているのに対し、混合型では65.5%である。

さらに、今後の学生・社会生活への寄与をみたのが表9であり、女子に $P < 0.01$ で有意な関連がみられた。

表9 今後の学生・社会生活への寄与

	男 子			女 子		
	寄 与	どちらとも いえない	寄与せず	寄 与	どちらとも いえない	寄与せず
分離型	44.1	18.6	37.3	62.1	24.1	13.8
混合型	33.3	21.5	45.1	41.2	20.6	38.1
単一型	38.8	27.1	34.1	49.2	25.0	25.8

男子：ns，女子：P<0.01

ここでも分離型の62.1%、単一型49.2%が寄与すると答えているのに対し、混合型では41.2%と低い値になっている。

以上から、「分離型」「単一型」よりも「混合型」に何らかの問題点があることが示唆される。「部活動と異なる種目である方が必修クラブにおける活動が徹底する⁵⁾」と藤田の指摘にもあるように、分離型は、必修クラブのねらいを独自の活動として追求することができ、望ましい形態と言えるだろう。しかし、どうしても広く、浅くといった単調な活動に陥りやすいことが問題点でもある。これに対し、単一型は、目標も明確であり、内容も密度の濃いものを期待することができるが、部活動の延長といったイメージがつよく、教師、生徒双方に“必修クラブのねらい”に関してあやまった認識を呼び、本来のねらいを追求する上でマイナスな面がでてくるものと思われる。そして、混合型においては、部活動所属者にとっての「内容のものたりなさ」、非所属者の「疎外感と窮屈さ」が推測され、上述のような結果になったと考えられる。また、女子にだけ有意な関連がみられた点については、女子に既に来上がったグループに入っていくことに対する抵抗感が強いこと、グループが排他的になりやすいことなどを指摘することができるだろう。

V 結 語

他の項目に比べて、「上・下級生の雰囲気」、「教師の適切な指導」に問題点が見い出された。かつては地域の遊び仲間の中で培われた上・下の関係、いわゆる異年齢集団でのつきあいが、受験体制の中で希薄になっていることとも関連して、必修クラブは、「人間と人間のつきあい方」「人間とスポーツの上手なつきあい方」を学ぶ機会として今後とも重要な位置を占めるといえよう。そし

て、教師も生徒の自主的活動を助長するように適切な指導をおこなう必要がある。また、実施形態のところで混合型に問題点が見い出されたわけだが、これは、必修クラブと部活動の境界線（ねらい）のあいまいさに起因すると考えられる。「競技志向型」の部活動に対し、必修クラブは「人間関係志向型」といえ、それぞれのねらいをそれぞれの観点から追求していくことが重要になってくるだろう。しかし、部活動と必修クラブは全く別個の活動であるといった考えにたつのではなく、両者の間には、競技志向を通しての人間関係、人間関係を通しての知識や技術の習得といった表裏の関係があることも忘れてはなるまい。

（この論稿は日本体育学会第36回大会において「必修クラブに関する若干の考察」と題して発表したものであることを付記しておく）

引用文献

- 1) 文部省：高等学校学習指導要領、大蔵省印刷局、1978、P 157.
- 2) 文部省：我が国の教育水準（昭和55年度）、大蔵省印刷局、1981、P 176.
- 3) 堀 久編：改訂高等学校学習指導要領の展開（特別活動）、明治図書、1978、P 113.
- 4) 松永淳一：必修体育クラブにおける現状と問題点—その2—、長崎大学教育学部教育科学研究報告 第26号、1979、P 103.
- 5) 藤田千鶴子：「中学校における必修クラブと運動部にみられる地域差について」、体育社会学研究会編、体育とスポーツ集団の社会学所収、道和書院、1974、P 202.

参考文献

1. 吉本二郎編：改訂高等学校学習指導要領の展開（各教科以外の教育活動）、明治図書、1971.
2. 全国教育研究所連盟編：クラブ活動の教育的効果、東洋館出版社、1981.
3. 佐伯聰夫編：現代スポーツの社会学、不昧堂出版、1984.

（昭和60年10月31日受理）